

野口芳子著『グリム童話のメタファー—固定観念を覆す解釈—』

勁草書房 2016年8月

谷口秀子
(九州大学)

野口芳子著『グリム童話のメタファー—固定観念を覆す解釈—』(2016)は、グリム童話研究に資する事項が網羅された研究書である。加えて、本書は、そのタイトルに違わず、グリム童話に関する通説や固定観念を覆し、読者の知的好奇心を刺激する極めて面白い読み物でもある。本書は三部から構成されており、著者は、グリム童話という深い森に三つの異なる角度から光を当てることにより、グリム童話の深層に迫り、その全貌を立体的に浮かび上がらせることに成功している。

第I部では、グリム童話の「白雪姫」「いばら姫」「赤ずきん」「灰かぶり(シンデレラ)」が、ジェンダー社会学的な視点から分析されている。著者は、グリム童話の複数の版の比較対照とグリム童話におけるメタファーおよびシンボルの詳細な分析により、グリム兄弟によるテキスト改変の背後にある彼らの意図や社会の価値観をあぶり出し、これまでのグリム童話に対する解釈や固定観念を覆す新たな視点を次々に提供する。また、著者は、「白雪姫」「いばら姫」「灰かぶり」に関して、グリム版とディズニー版を比較することにより、現代のディズニー版の方が、性別役割などの近代のジェンダー観を、グリム版よりも色濃く反映していることを力説する。

第II部では、日本におけるグリム童話の翻訳と受容と改変が論じられている。著者は、グリム童話が日本に紹介された経緯とグリム童話の日本への導入の過程で加えられた改変を、資料にもとづいて詳細に分析し、明治期の日本が、グリム童話の内容や主張を必要に応じて取捨選択し修正した上で、近代的な道德観や国家意識や性別役割などを国民に植え付ける手段として利用したことを、説得力をもって論じている。

第III部には、第I部で取り上げられた「白雪姫」「いばら姫」「赤ずきん」「灰かぶり」の四作品の初稿、初版、決定版の著者自身による日本語訳が収められている。グリム童話の日本語訳については、版によって翻訳者が違うため、同じドイツ語の単語の日本語訳が版によって異なり、日本語訳を読んだだけでは、版による表現の違いが、ドイツ語の原文の違いによるものか、翻訳の違いによるものかが、判別できないという問題があった。本書では、著者が初稿、初版、決定版という複数の版を一貫して翻訳し、同じドイツ語の語や表現には同じ日本語訳をあてることにより、この問題が解消されている。この画期的な試みによって、より多くの日本の読者がグリム童話の改変の過程を詳細に知ることが可能になる意義は大きい。特に、ドイツ語圏文学を専門としない欧米文学の研究者にとって、多くの西洋文学作品に影響を与えているグリム童話の実像を、このような形で知ることができるのは大変ありがたい。著者によるこの試みが、本書に収録された四作品以外にも広がることを、切に願っている。

『グリム童話のメタファー—固定観念を覆す解釈—』において、著者独自の視点が最もよく表

れているのは、第I部であろう。著者は、グリム童話におけるメタファーやシンボルを丹念に読み解き、グリム童話に潜む隠れたメッセージを暴き出す。著者によると、伝承文学であるグリム童話には西洋の古代、中世、近世といった時代の価値観が交錯しており、登場人物の行動の背後には、現代人が見落とししがちな中世以前の価値観がメタファーという形で潜んでいるという。著者は、そのメタファーを、慣習法やキリスト教などに関する幅広い知識を駆使して解読することにより、グリム童話の根底に横たわる真実を浮かび上がらせる。なかでも、「灰かぶり」におけるメタファー解析は、とりわけ興味深い。著者は、グリム兄弟によって「灰かぶり」にちりばめられたハシバミの枝や靴などにまつわるメタファーを、当時の慣習法や風習にもとづいて丹念に読み解くことにより、法律の知識を生かして母の遺産の譲渡権を主張し、自らの力で幸せをつかみ取ろうとする、賢く行動力のある逞しいヒロインとしての灰かぶりの姿を描き出す。

このように、グリム童話に関するさまざまな固定観念を覆し、新しい視座を提供する『グリム童話のメタファー — 固定観念を覆す解釈 —』は、読者に発見の驚きと楽しさをもたらす極めて刺激的なグリム研究書である。